弘前ねぶたと沖縄エイサー

- Neputa and Eisa -

1K06B010

指導教員 主査 寒川 恒夫先生

荒田 小太郎

副査 中竹 竜二先生

<序章>

私は、父親が弘前出身で母親が沖縄出身である。そのせいもあって小さい頃から自分の周りには常に弘前ねぶたと沖縄エイサーがあった。私は弘前ねぶたには幼稚園の頃から高校卒業までの間、毎年参加して来た。そして二年一度は沖縄へお墓参りに行っていたのでその際にエイサーに参加していた。しかし大学に入学しねぶたやエイサーについて考えてみるとわたしは参加こそはしていたものの、その祭りのほとんどの事を知らなかった。そこで卒業論文では弘前ねぶた・沖縄エイサーの起源や歴史・構成などいままで自分が知ることの無かった祭の本来の姿を見つけ、そこからねぶたとエイサーが今後どのような道をたどっていくべきなのかを考えて行こうと思う。

<第一章>

ねぶたの起源、歴史についてねぶた祭はどのように始まり、どのように発展していったかについて書いている。藩政期のねぶたに始まり重要無形文化財指定を時代と共に追っていき詳細を調べることでねぶたとは一体どのような祭りなのかを明らかにした。

<第二章>

ねぶたはどのような物から、どのような工程で作られているのかという基本的な構成について調べた。現在のねぶたは扇ねぶたが主流であり、その扇ねぶたにの表面には武者絵という三国志を題材に描かれた絵が貼られその武者絵が

弘前ねぶた最大の特徴である。またその裏面には見送り絵と呼ばれる妖艶な女性の絵やおどろおどろしい髑髏や虎の絵が描かれこれも弘前ねぶた特有のものである。また扇を乗せる台につける開きと呼ばれる仕掛けや、額と呼ばれる台の側面などにも細かい細工がなされ、そのすべてが一体となりねぶたという一つの芸術作品に仕上げている。

<第三章>

沖縄エイサーの起源や初期のエイサー、明治以降のエイサー、戦争とエイサーなど歴史的な流れを追うことでエイサーが歩んできた道のりを調べた。沖縄は米軍による統治など日本でも一番と言っても過言ではないほど戦争に翻弄された土地である。そのような厳しい状況下でも沖縄の人々はエイサーに救いを求め、力を合わせエイサーという伝統行事を守ってきた。その島民の熱い気持ちが今日の沖縄エイサーを支え続けている。

<第四章>

沖縄エイサーの最大の特徴はリズムカルな踊り、レパートリー豊富な歌と三線、力強い太鼓舞である。しかし地域によって歌唱構造から舞踊体系まで多岐にわたっている。またエイサーは旗頭・ウフデークー・シメデークー・パランクー・手踊・地謡・京太郎など役割が多い。さらにエイサーの歌は王朝時代の琉球言葉を使った歌詞が多く、なかなか理解しがたい歌が多い。そこで舞踊や歌唱の分布、種類をまとめ、

代表的な歌の歌詞の大意も調べた。

< 結章 >

調べたことをもとに、ねぶた・エイサーがその美しい伝統を守りながら日々進化し、目まぐるしく変わっていく現代で過去の遺物ではなく、昔を生き、今を生きる伝統行事としてどのように歩いていくべきなのかを述べている。少子高齢化、地方都市の過疎化が進み、情報過多の社会がどんどん効率化、無機質化していくなかでこそ祭りや伝統行事のようなリアリティのある体験を通しての生身の人間との触れ合いが重要になってくると私は思っている。人と話し、酒を飲み、助け合い、叫び笑いながらのいわば半狂乱の実体験の中にこそこれからの社会に必要な人間の活力が隠されているに違いない。